
妹と言う名の悪魔{パーフェクトグレ〜ド}

愚図男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹と言う名の悪魔へパーフェクトグレイド

【Nコード】

N2501D

【作者名】

愚図男

【あらすじ】

主人公の前にいきなり現れた悪魔な少女、四級悪魔レイミ、魂半分で願いをなんでも叶えるそうです………たぶん？

悪魔はまだやって来ない（前書き）

短編のを連載させてもらおうかと.....色々未熟ですが、よろしくおねがいします（^ー^；）

悪魔はまだやって来ない

土曜の夕方リビングにて俺は…

「あんたってホント最低!!」

バゴッ!!

「アベシ!!」

一つ歳の違う妹に殴られていた

ことの発端は妹の憧れの先輩であるサッカー部のエースでモテモテの藤堂（俺とはタメ）を殴ったことから始まった

だってさ……あの場合殴るだろ、

昨日のこと学校から帰ろうと下駄箱から靴をとって履くと

訳あって帰宅部です

なんと話し声が聞こえてくるではありませんか!!

藤堂のヤツです、今から部活に行くのか仲間達と話しているみたいです。

「あの話しなんだけど、あれマジか？」

「ああ、あれだろ」

「例の女だろ？」

「てかあのやり方でマジで女が釣れるとは思わなかったぜ」

「ホントホント、てか藤堂さすがだな」

「だから言っただろ落とせるって」

と、言っでどいつもこいつも笑い始めた

「はーマジウケル、後はヤルことやって協力してくれたお前らにきちんと回してやるからよ」

「お、わかってるねえ頼むぜ藤堂」

ああ、そうだったんだ

前の晩にやたらと上機嫌に家に帰って来た妹が人の部屋に乱入して来た

「うわっ、タバコ臭っ！！」

人の部屋のドアを開けるなり文句を言い始めた

「なんで、そんなんの吸ってるの!？」

ガラガラと勝手に窓を開け始めた

「おい、高校一年の分際で10時帰りか？この不良娘め」

夜の10時です

「いいじゃん、どうせお父さんもお母さんも仕事で遅いんだし」

と言って、人の話しなんぞ聞いちゃいない

「まだ出てかないのか？」

人の部屋に勝手に入り俺のベッドでくつろぎ始めた

「ねえねえ、今日いいことあったんだけど聞きたい」

そう言い人のベッドの上でゴロゴロし始めやがった

ウツゼー！！！！

話したいんだろ？

こんな時は聞いてやるのが一番だ

とつと聞いて自分の部屋に戻ってもらうのが一番だ

「ふん、で何したの？」

ソファでくつろぎながらタバコを吸っていた俺はそれを灰皿に押しつけ目の前にいる妹に目を向ける

すると妹はニツと顔を微笑ませ寝ていた体を起こしてベットに座る

「今日、友達と学校帰りに遊びにいったの」

妹は今日起きたことを身振り手振りで話す

要は友達と遊んでいるとタチの悪いナンパ集団が絡んで来て逃げようにも囲まれてしまい困っていると、

一人の男がナンパ集団を追い払ってくれたらしい

「ふ〜ん」

「それがねその人はなんと！うちの高校の藤堂先輩だったの！」

藤堂？……あ、サッカー部のね

「しかも！！あの藤堂先輩が私に今度、デートしようって誘ってくれたの」

と、今にも昇天しそうな幸せそうな顔でクッションを抱き締めた

「…………ふ、ふ〜ん良かったね」

「もう幸せすぎだよ／＼」

なんか、悔しいような寂しいような気持ちに俺はなった

自分のノロケ話をして気がすんだのか
もう寝ると言い部屋をでていった

てのが昨夜の話し

「おい」

俺は迷わず目の前の奴等が妹のことを話しているとわかり
藤堂の肩を掴んで呼び止めた

「は？何だよ」

呼び止められた藤堂はうざったそうにおれを睨んで
肩に置かれた手を払った

「デメエ、今の話し本当か？」

「だったら何？お前に関係あんの？」

藤堂は俺の方に体を向け直すと
俺の胸倉を掴んできた

「人の話し盗み聞きしといてさ、いきなりなに？」

お前こそ何だ？ただ呼び止めただけでその喧嘩腰は

「なんかさあ、あんたの顔気に入らないんだよね」

そりゃどうも

「そんなんでもいい、確認のためだ
さっき話してた女って一年の斉藤明香か？」

「だったら何？」

すると藤堂はその整った顔をニヤリとさせて言った

「ふうん、もしかしてあの娘に惚れてるのかな、今の話し聞いてム
キになるのは？」

「……………」

「ゴメンね、あの娘今俺に惚れてるみたいだからさ
そうだ、ヤリ飽きたらお前にも回してやろうか？ハハハハ！！！」

そろそろ我慢の限界だ……まあ、元々我慢する気はないが

「腹いてえー！！あの女もお前もバカみてえ、お前らもそう思うだ
……………ろ？」

藤堂は今まで他の奴等が後ろにいるものだと思い話しかけたがしか
し返事が帰ってこない

「あ、あれ？」

その頃他の奴等は……

「はあ、はあ」

走っていた

「や、ヤベエよアイツ斉藤だよな！？」

「ど、どうする！？顔覚えられてねえよな！？」

「し、知るか！！とりあえず俺今日帰る！！んで明日も休む！！」

「お、俺も！！」

「な、なんだ？アイツら部活行っちゃったのか？」

藤堂は辺りを見回している

「おい」

「あ？」

ドゴッッッッ！

「っ！！！！」

ズザザザー

おもつくそ殴ってやった

「な、なにひやがる！！？」

藤堂は何とか起き上がろうとしているが、起き上がれないようだ

「なあ、お前人の妹をどうするって？」

言いながら藤堂の胸倉を掴み起こす

「ひっ！？」

「次に妹に近付いてみる、これだけじゃすまさねえ」

そうとう驚いたのかそれ以上言葉を話さずただ首を縦に振るだけだった。

「さあ〜と」

パッ

掴んでいた胸倉を放してあげた

「おい、残りのアホどもの名前とクラス言え」

名前とクラスを聞き出した俺は、撲滅リスト（メモ帳）名前を認め
奴等が逃げ去った方角へと猛烈ダッシュした

その後の彼等のご想像におまかせ致します。

そんなことがあって今リビングで倒れています。

悪魔がお家にやってきた（前書き）

二話目の更新がかなり遅れました、申し訳ありません。
読んでやってください

悪魔がお家にやってきた

はあゝ

人の話しなんぞ聞やしねえ！！

苛立った俺は階段を昇り自室のドアを開けた……………

「や、こんにちは」

変なのと目が合ってしまった

金髪ストレートの髪が肩まで目の色はブルーで背中からコウモリの羽根みたいなのが出ていて

黒いレザーのブラ？黒いミニスカに長い黒ブーツでキメた整った顔の少女が怪しく笑いながら俺の机の上に座って足を組んでいた

とりあえず俺は

「寝よ」

寝ることにした

ベットに横になり布団を体にかけてようとしたところ

「ち、ちよつと待ってよ！！」

かなり慌てたのか、呼び止められた

「チツ……………」

「普通こんな所に人がいたら驚くでしょ！？しかも、舌打ちって！？」

のっそりとベットから起き上がりベットに座り少女の方へと目をやる
すると、待ってましたとばかりに

ヒョイと机からおりて仁王立ち……………て、背小ささ！！

「聞きなさい人間！！！！」

この私へ四級悪魔」

レイミ様が今ならなんと！！

魂半分でああなたの欲望を叶えてあ・げ・る」

決まった、と言わんばかりの顔で人差し指をこちらにさしながら言
った

「フフ」

「……………」

なんと言いますか、

イマイチ迫力に欠ける

たぶん、

150あるかないかの背丈のせいである

それに四級悪魔ってのは凄いのか??

「フフ」

「……………」

「フフフ」

「……………」

「フフ……………」

「……………」

「……………あ、あの何か言つことないかなあ？」

長い沈黙に耐え兼ねたのか話しかけて来た

とりあえず機嫌が悪いので

「……………帰ってくれ」

帰ってもらつことにした

「え？」

「帰ってくれ」

帰れ！！今すぐ帰れ！！

相手の目を見て誠心誠意、真心込めて言った

「……………は、はい」

意外と素直な性格らしく、瞳に涙を溜めて今にも泣き出しそう顔で侵入したであろう部屋の窓に足をかけた……………

「あ」

「え！なにになになに！？」

泣き顔は一変して笑顔でこっちへよって来た

「帰る時ちゃんと窓閉めて行けよ」

四級悪魔と名乗る少女はかなり落ち込み帰っていった

「ハア……マジで何だったんだ？」

今の出来事により一層疲れが増した
ついでに小腹も空いた

キッチンに行くためドアを開けた時、丁度妹も部屋を出てきたらしく廊下へ出たところで鉢合わせをしてしまった

（丁度いい謝ってしまおうこれ以上ギクシャクするのは嫌だし）

「明日香、その……」

「……兄さんはどうして私の邪魔するの？」

「いや、邪魔とかじゃ……」

「言い訳しないで！！ホント最悪！！コレじゃ藤堂先輩に顔合わせられないじゃない！！」

「……………ああそれでいい、オマエの男見る目は無さすぎだ」

キツいかもしれないがここは譲らない

「もういい！！人に手を出すような兄なんかイラナイ！！」

「……………」

そう言つてまた部屋に戻つて行きやがった

「チツ！！人の話しなんか、聞きやしない！！」

俺だつてな、もっとちゃんと人の話を聞く妹が欲しかったよ！！」

わざと聞こえるようにかなりデカイ声で言った

その後は夕飯を食わずにそのまま寝た

悪魔のど根性（前書き）

頑張りました……

悪魔のど根性

翌朝

עֵצָה עֵצָה עֵצָה.....

ガチャツ

עגעגען...עגעגען...עגעגען

ガチャッ！

עג עג עג עג עג עג עג עג

「目覚ましの分際でいい根性してるじゃねえか」

昨日に引き続き朝から胸くそ悪い

「ハアゝ学校があゝダアリィ」……ん？そうでもないな今日からまた部活に出れる……」

目も覚めたので下に下りる

リビングに入ると母親がキッチンで朝食の準備を済ませ食器を洗っていた

「おはよ……あれ？明日香は？」

「おはよう、明日香なら朝食食べて学校に行ってたわよ」

「まだ7時15分たぞ早すぎないか？」

「あら？そう言われれば、あんた達またケンカでもしたの？」

「……別になんもしてねえよ」

さすが母だ鋭い

「まあ、いいわ早いとこ食べちゃって食器が片付かないでしょ、母さんも仕事に行かなきゃいけないんだから」

「はいはい、いただきます」

椅子に座り飯を掻き込む、やっぱり朝はゴハンに味噌汁だろ

「ふあゝゝおふあよゝゝ」

「うーす……………」

「あら、おはよほらシャキツとなさい、ゝゝ飯食べて」

「フアゝゝい」

あれ？

飯を味噌汁で流し込んでいるところで動きが止まった

「えええ〜パンじゃないのお〜？朝はパンがいいのにい〜」

と、お袋に文句を言っている俺の隣に座っているヤツに目をやる

「我慢なさい」

「ぶうー」

と、何やら不満そうに朝飯を食い始めた

(…………あれ？こんな家に居たっけか？

いや、居ねえ、しかも朝はパンだと！？

この西洋かぶれが日本人なら米を食え！！)

「ごちそうさまあ」

パタパタと駆けて行きそうなところで

「マテヤコラア！！」

ガシリとヤツの頭を鷲掴みする

「いた、いたい！」

「ん！テメエは昨日の！？

こんなとこで何してやがる！？」

すると少女は慌てて

「あ、あれ記憶操作の魔法がきいてない!？」

は？記憶操作？魔法？

何やら訳のわからん単語が出てきた

「てか、マジで何なんだテメエは!？」

何者だ!?!」

すると母は何やらすつとんきょんなことをほざき始めた

「何者って？礼美ちゃんはお前の妹でしょ、朝からふざけたことしてないでサッサと学校に行きなさいよ」

な、なにイ!?!？」

「いやいや!?!、ちょっとまって!?!」

玄関でヒールを履いて今にも家を後にしそうな母を追いかけて呼び止める

「コレが妹だと？」

頭を鷲掴みにし持ち上げてコレを指差す

「痛い、痛い！！」

「おい！！母よく見ろなぜ日本人のアンタからこんな髪金の目の色が青いやツが出てくるってんだ！！」

グイッとヤツの顔を母に近づける

「何故って、遺伝子のナンタラでこうなっちゃったんだから仕方ないでしょう」

そう言つて母はドアに手を掛け

「じゃ、お仕事に行つてきます」と言い残し去つていった

「い、遺伝子のナンタラって……………」

何故に母親のアンタが病名を知らない

一気に力が抜けて掴んでいたヤツの頭を離れた

「イッタ〜イ！！！！首の骨が抜けるとこだったじゃない！！
下等な人間がレイミ様に手を出すなんて百年早いだよ！！」

手を離れた瞬間元気になったのかワーワーと偉そうに手を組んでゴチャゴチャとちんまい身体でぼざぎ始めた

「…………おい」

「だいたい、ヒツ!!」

何やら長くなりそうなのでイラッときた

「俺の質問に答えてねえだろ、何でココにいる?」

両方のホッペをムギユツと片手で寄せる

「ふあって、ファファヒフォひぷ……………」

「あああ?何言ってか解んねえぞ!!」

と、いった具合に灸を添える

さつき、下等な人間とか調子こいたこと言ってたからな
手を離してやる

「だ、だってだって人の話を聞く妹が欲しいって叫んでたじゃない!!」

今にも泣きそうな顔になり目に涙を溜めている

「は?」

意味が解らん

「願い事叶えたんだから魂をわた……………た、魂を半分ください」

また調子に乗りそうなのでシッカリ脅しを効かせた

「……………今すぐ帰れ」

「か、帰らないもん!!」

今日から家族に妹が追加されたらしい。

「ねえ、マジ帰って」

「か、帰らないもん……………」

その事を認識してるのは俺と、コレだけらしい

登場人物1（前書き）

一応作ってみました。かなり下手くそです
（ - o - ; ）

登場人物 1

さいとう かねさだ
斎藤 兼定

17歳、高校二年の主人公

身長177cm

生まれつき目付きが悪く中々交友関係に恵まれない

性格、女好き（年上限定）残りはカスと断言

やや狂氣的な一面が会ったりするが実は優しいしかし、それを理解してくれる人は数少ない

本人は決して不良ではないと言い張る

レイミ、（礼美）15歳の四級悪魔

身長140cm本人曰く150cmだと言い張る

ブロンドのストレートヘアを肩まで伸ばした目の色ブルーの日本人

とは思えない外見

性格、明るく中々いい根性をした図太い女の子、

頑張り屋で憎めないヤツ

自分の幼い体型にコンプレックスをもつ

まだまだ未知数なヒロイン

さいとうあすか
斎藤明日香

16歳、高校一年の今時女子高生、主人公の妹

身長160cm黒髪ショートカットのボーイッシュな女の子

性格、外見とは違いかなり乙女的な所が多々ある優しい子

言い寄ってくる男子が多く、いつも男子と付き合う手前で兄の兼定に邪魔される（本人にその気はない）

そのたびにケンカをする

兄曰く

「男を見る目が無さすぎ」だそうです

母

38歳

只今一家の大黒柱

仕事はできる、家事はお手のもの、まさにパーフェクトな母
怒ると怖い

父

39歳

2日ほど前に浮気がバレて家を追い出された、明日香には単身赴任
と知らされている

只今必死に母に謝っている

戻ってくるのは、まだまだ先になりそうだ

悪魔な1日の始まり1（前書き）

読んで頂けると嬉しいです

悪魔な1日の始まり1

「……………」

「……………」

その後、学校に遅れてしまうという理由により、コイツのことは忘れて

準備を済ませて玄関を出て気がついた

目の前にはあの悪魔がチャッカリ制服に着替えて立っていた

「……………1つ聞いていいか？」

「エーあつ、はい……………」

何やらチョット齒切れが悪い、アレかさっきのお灸がきいてるみたいだ

「なぜ、うちの学校の制服を着ている？」

それが疑問だった

俺が行っている高校は男子黒ブレザー、女子黒セーラーのまあ普通の高校だが

そのセーラー服を着ていたのだ

「え？あれ？学校にはコレを着ないといけないんじゃないの？」

そう言ってワタワタと自分の制服を確かめる

いや、合っではいるよ

「いやいや、そうじゃなくてだな
なんでうちの学校の制服を着てココに立っているのかと」

ワタワタしていたのが止まり
さも当然と言わんばかりに
自分の胸に手を当て

「学校に行くのは当然のこと！！なんとと言っても学生は……」

「違う！！何で悪魔のお前が学校に行く必要があるんだ！！」

そう、これは大切な事だ

「だって、一人で家にいるなんて寂しいもん！
それに私にはアナタを監視もしくは魂を半分貰わないといけないと
言う使命があります！！」

ビシッ！！と人差し指を突き付ける

「ア、アレ？」

しかし、指された指は空を指していた

周りを見ると走り去っていく後ろ姿が目についた

「ち、チョット待ってよ！！」

悪魔な1日の始まり2（前書き）

結構な長文になってしまいました。読んでやってください。

悪魔な1日の始まり2

ダダダダ

「ハア、ハア、ハア」

今、俺は力の限りあの悪魔との距離を離すため全力疾走している

「ま、待てゝ!!」

俺が逃げたのがわかったのか悪魔もダツシュを始めた

(フン、バカめ俺は足に自信があるんだよ)

最初のスタートで10メートルほど離れたし後は余裕……

「待ってよお!!」

「!!」

いつの間にか俺の横を走ってやがった

「何で走るの!?!」

「う、うつせえ」

や、ヤバい息が上がってきた
マジでか!?!

「ゼエ、ゼエ、ゼエ」

300m位疾走する悪魔と俺、それにも関わらず俺はすでに息がもう……………

「うわっ!？」

その時だった横を走っていた悪魔は何かに躓いたらしくそのまま

ズザアーとヘッドスライディングをしながらこけた

(フハハハハ、俺の勝ちだ)

何とかプライドを保ったとそんな小さい事を思いながら駆けていった

「ううううう、痛い」

私はヘッドスライディングしたままのうつ伏せ状態で痛さに耐えていた

「何なのよ、いつも私ばかり……………」

そう、こんなことは今に始まった事ではない思えばそう、あっちの世界でも……………

それにここに来るときだって……………

それに、あの男のこの私に対しての扱い……………

「グスッ」

少し泣きたくなってきた

「おい」

「……………うううグスッ」

「オイって」

「ふえ？」

顔を上げると先程追いかけていた、あの男がいた

「いつまでもそんなところで倒れているのはみっともないぞ、ほら」

そう言ってしゃがんで手を差し出してきた

「……………」

予想外の出来事に

彼の顔と手を交互に見る事しかできなかった

「ハアアアたく、しゃあない」

中々手を取らない私を見かねたのか

「うわっ！」

うつ伏せの私のわきを持ちそのまま私を立たせた

「服の汚れくらい払えよ」

まだ、ボーとしていた私に彼は言った

「……………」

ポンポンと上着とスカートを払った

「ほれ、学校行くぞ」

歩こうとしたとき

「痛っ」

膝小僧から血が出ていた

「怪我したのか？」

先を歩いていた彼は声に気づいて
後ろにいた私の足を見て

「結構酷いな、こっからだと学校に行くより一回家に戻った方が早
いな、歩けるか？」

「……痛っ！」

「歩けそうにないな」

そう言って背中を向けてしゃがむと

「ほら、乗れよ」

「え？い、いいよ」

「でもソレじゃ痛くて歩けねえだろ」

「で、でも……」

「……乗れ」

「ハ、ハイ」

あまりにも目が怖かったので言っ通りにした

しばらくおんぶしてもらい、家に戻ってきた

ドアを開けてそのままお風呂場まできた

「シツカリ、傷口の砂を洗い流せよ」

「……………」

ジャーとシャワーを出して傷口に当てる

「つつ！！」

「染みるけどちゃんと洗わないとダメだぞ」

洗い終わるとそのまま

「え？あれ！？ち、ちよつと！？／／／」

なんとそのままお姫様抱っこをされた

「いちいち、うるっせえなあゝ、こっちのが楽なんだよ」

そのままキッチンに連れていかれ椅子に座らせられた

「ちよい、待つてな」

タタタと二階へ駆け上がって行った

「……………」

（おんぶなんてされたの初めてだったな……………それにお姫様抱っこ
って／／／）

なんてことを思っていると二階から彼が降りてきた
そして私の前でしゃがむと

「ほれ、怪我したほうの足出せよ」

言われたまま、足を出す

すると以外と手際よく傷口に下処理をしていく
滲んだ血を消毒液を含ませたティッシュで一度拭き取るとその上に
軟膏を塗りガーゼして最後に包帯を巻いた

「慣れてるね……」

私はボソツと言った

「あ？まあ結構しょっちゅう怪我するからな、慣れた……」

そう言うところとただけ寂しそうな目をした

「他はどうか怪我してないか？手見せろ」

言われて手の平を開いて見せた

「よし、じゃあ後は大丈夫だな……後、悪かったな」

そう謝ってきた

「え？なんで？」

「いや、結果的に転ばせて怪我させたの俺のせいだしな、それにさ
つき泣いてたろ？だから悪かった」

そう言つと頭を下げた謝つた

「い、いい氣にしてないし！私の方が余計に氣を使わせたみたいだし……………」

「……………」

「……………」

チヨットの間沈黙が続く

「あ、ヤベエ遅刻だ」

そう言われ時計を見ると針は8：20を指していた

悪魔な1日の始まり2（後書き）

評価して頂いた方々へ

大変ありがとうございました

参考にさせて頂く所や意欲を沸かせて頂く所をありがとうございます。

後々感想を頂いた方々に返事を書こうと思います。

だいぶ遅くなってしまうかもしれません

これから宜しく願います。

悪魔の事情（前書き）

大変申し訳ありません、諸事情により更新出来ませんでした。
また読んでやって下さい。

悪魔の事情

「ハア、完全に遅刻だな」

諦めたのかドカツと隣の椅子に腰かける

「ご、ゴメンなさい」

「いって気にすんな、まあ一時間目には間に合うように行くべ」

時計の針が動いて行く

（ハア、初日から大変なことばかりだなあ）

そう思いふいに横に座る彼の顔を見る

（昨日と今日だと別人みたいだなあ、怖いだけの人かと思ったけど……）

「ん？なんか忘れてねーか？」

（怖いけどこの人本当は優しいんだ……）

「ん？ん？何だっけ？」

怪我をした所を見る

（誰かに手当てして貰ったの初めて……それに、なんだかさっきから胸がドキドキする……あ！これが……ここ……）

「そうだ！！テメエのことだ！！」

ガタン！！

座っていた椅子から立ち上がり物凄い形相で私を見ていた

「はわあー！！」

驚いて椅子ごとひっくり返る

「お前がなぜここに居やがる！？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あれ！？話してないっけ？」

「話してねえよー！！」

目の前に座る悪魔の話しは微妙だった

「本来、人間は体に1つの魂しか宿してはいけないのだけど、ごく希に2つ宿してしまう人がいるの、どうしてそうなるかは未だに解明されてないのです」

「はあ」

「2つの魂を宿した人間は天国と地獄に大きな災いをもたらすと言伝えられているのです」

「ほあ」

「で、て……真面目に聞いてよ!!」

聞いてましたよ

ただ話がぶつ飛びすぎて解らん

「ソコで魂を貰う替わりに

この四級悪魔のレイミ様自らが下等な人間の住む地に降りて来てやって、人間の願い事を1つ叶えてやって魂を貰うわけなの!!」

バシッと座っていた椅子に仁王立ちして
見下すように言った

「ほあ、テメエは学習能力が相当無いようだな、ああ？」

出てる釘は打たないとな、これ常識

「……………グス、ごめんなさい（涙）」

「…………ズキ」

打ちすぎにも注意しよう

「それで、魂を1つ渡せばお前は帰ってくれるのか？」

「うん、帰るよ」

「じゃあとつとと持って行け」

「え？でも魂を引き剥がすと死ぬよ」

「……………聞いてねえぞ」

「……………言っていないもん」

ブチッッッッ！！！！

パソコン

「痛い！！な、何で叩くの！？」

目元を涙で濡らし猛抗議してきた

「……………今は叩くだろ、かなり大事な部分をすつとばしたデメエが悪い」

「で、でもお叩かなくてもいいじゃん!？」

その後もギヤーギヤー喚くのがかなりウザかった

「んで本題に戻してもいいか?その魂を引き剥がすのを断った場合はどうなる?」

「え!?!断るの?」

俺の一言にかなり驚いたらしく
ポツケから何やら本を取り出した、
それを開き読み始めた

「うゝんと……目次、目次、えゝとねえ214ページ」

何やら部厚い本を取り出しページをめくる

(ん?今コイツどっから本出した?)

そして机に座り直し本を立てて読んでいる背表紙には

“ 悪魔の初めての仕事・初級 ”

御丁寧にフリガナまで書かれている、しかもなぜ日本語？
色々突っ込みたいところだ

「あつたあつた、え」と……魂を取れない場合は行動を共にし、奪
い取ってください。……ね」

眼を輝かせ宝物を見せる子供のようにそのページの一文を指差す

「だから、しばらく私はココに住まないといけないのです」
なぜ？そうなるのかわからんが

「……………」

「よろしくね」

コイツが家族の一員になるのは決定事項のようだ

悪魔と通学はなかなか進まない（前書き）

あゝ何か最近時間が進むのが速く感じます。このまま一気に歳を食ってしまいそうで怖いです。

悪魔と通学はなかなか進まない

何やら話がゴチャゴチャしてきたので

「……………そろそろ学校行かないと」

スルーすることにした

あの芸人も左に受け流せと歌っていた

「え？、ねえねえ」

流されたのがわかったのか、このちびっこはさっさとリビングを出ようとする俺を止めに入った

「まだ話が終わってな、ふぎゅ!？」

とりあえず、ホッペを片手で掴み話せなくする

もう、朝からダルいコイツのお陰で考えるのが面倒だ

「うぎゅゝ、むぎゅゝ」

ぽん

「な、何するのよ!！」

話を遮ったことに不満なのか、やけに御立腹だ

「…………ウザ、とりあえず帰れ」

とりあえず本音をぶつけてみることにした

「う、うるさくないもん！！帰らないもん！！」

ああ面倒だ

「別に魂が2つ有ってもいいだろ？減るもんじゃねえし、それに地獄だか天国にも迷惑かけるつもりもないし」

「で、でも決まりなの！」

眼に涙を貯めて今にも泣き出しそうな震えた声
ああゝ本当に面倒だ

「だああああ！！わかった、わかったよ、好きにしろ」

「グス………本当？」

「ああ、ダリイからこの話は今日はなし」

それよりも、今は時間が気になった、
げ！？もう一時限目始まってるし

「とつとと学校行くぞ」

ひよい

「う、うわっ！？」

ちびっこを脇に抱えると玄関をでる

「な、なにする!？」

「ああ!？テメエのその足じゃ走れないだろ、お前軽いし抱えて走った方が楽なんだよ」

「い、いいよ、一人で動けるから!？」

じたばた、身体を動かして腕を振りほどこうとする

「どうやってその足で動くんだ？歩けるだろうけど走れないだろ？」

次の瞬間抱えていたコイツの背中から正確には肩甲骨の真ん中らへんからだか

バサッ

と、漆黒の翼が現れた

「飛んで行くからいい!」

腕を払いのけ宙へと浮かぶ

思ったがコレでは人目につくと思い

丁度俺の背丈を越えたところで軽くジャンプしてちびっこの片足を掴み下へ降ろしてやる

「うおりゃ!」

「え?.....ブギユ!!」

ドスンと顔面から地べたへ落下する

「あ、わりい」

気付くとおもいきり下へ降ろすのではなく
振り落とす形になっていた

「……………い、いたい」

流石にやり過ぎたと思いつつ伏せのままのコイツを起こす

「いや本当悪い……………あ……………」

身体をお越してやり顔を見ると額から血が滲み、鼻からは一筋の赤い線が

「ふ……………ヴ、グス……………いだび……………」

ああ、ヤッチまった

罪悪感に刈られながら

またもや、家に入って救急箱を持つてくる

「……………すまん許せ」

アア！！、俺よこんな時はご免なさいだろうが！！
素直に謝ろうとしない自分に自己嫌悪する
額に絆創膏をはっつけ鼻にガーゼを詰めてやる

「いだいよお……………何でこんなことするの……………」

その視線が痛い、まるで虐めっこを見る目で俺を見る

「すまん……てか人目のある所で飛ぶな、へたに目につくのは後々ウザイ」

「な、なんで怒られるのぉ」

自分でも理不尽なことを言っているのはわかっているが

「ああ！ウザイとりあえず謝ったからな！」

ヒョイ

「うわっ！？」

色々面倒になったのでコイツを脇に抱えるとそのままダッシュした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2501d/>

妹と言う名の悪魔{パーフェクトグレード}

2010年12月7日04時12分発行